

---

# 日本語待遇表現教育における 日本人学生参加型授業の試み

坂 本 恵

---

## 1 は じ め に

筆者は以前より日本語教育において特に待遇表現教育<sup>1)</sup>に関心を持ち、中級、  
上級<sup>2)</sup>での授業を実施している。また、待遇表現教育を行うのにおいて難しい  
とされる初級段階での授業もここ4年間にわたり本学に短期留学する留学生  
に対して行っている。この初級段階の授業を行う際、学習者に対する教育効果  
から、また、教務上の要請もあり、日本人学生が参加する形で授業を行っ  
ている。これらの授業は来日学生の形態、レベル、また、教務上の制約から、  
毎年のように異なった形で実施したため、すべてが試みの段階ではあるが、  
ある程度の成果は上げている。そこで、この試みの一部を紹介したいと思う。

なお、来日留学生とは、

- a) カナダ・ビクトリア大学から：3ヶ月（5,6,7月）2～4名 初級程度<sup>4)</sup>
- b) アメリカ・カンザス大学を中心とする諸大学（以下、カンザス大学と  
する）から：1ヶ月（6月）20名程度 初級～中級
- c) 中国・復旦大学から：1年 1名 初級

であり、aビクトリア大学からの学生と、c復旦大学からの学生は合同クラ  
スで3ヶ月授業（全12回程度）を行っている。また、来日学生の日本語のレ

ベルは人によりかなり異なり、筆者以外の非常勤講師による授業では2名であっても2クラスで行うこともあるが、筆者の授業は原則として異なるレベルの学生も一つのクラスで行っている。

また、ここで「日本人学生」といっているのは、経営学部、理学部の一般学生であるが、その中には、日本語超上級レベル学習者であるといえる、学部在籍の外国人留学生も含まれている。日本語母語話者である学生と学部留学生は必要に応じて区別するが、それ以外では一括して「日本人学生」と呼ぶことにする。

## 2 初級段階における待遇表現教育

### 2.1 待遇表現教育について

口頭表現の教育を行おうとすると、それはすなわち、待遇表現の教育になってしまう。どの言語においても事情はそれほど変わらないと思われるが、特に日本語の場合、相手や場といった条件を考えずに口頭表現を行うことはありえないとも言える。話し手は相手、場などを考慮した上で、自分の位置を決め、話し言葉の文体等を決めなければならない。相手や場といった条件を考慮した表現が「待遇表現」であるから、口頭表現はすべて待遇表現であるとも言えるわけである。文章表現の場合、特に相手を意識しない論文、レポートといったものもあるが、これらは待遇について考慮しない「脱待遇」であるということができる。口頭表現の場合は独り言を除き、相手や場を意識しないということはないだろう。独り言にしても、相手がいないという点において、相手を意識したものであるといえる。したがって、口頭表現の教育は、すなわち待遇表現教育といってもよい。

日本語教育の場合、日本国内において行われる教育の多く、特に初級では口頭での練習を中心としたものである。初級で最初の段階で学習する、「わたしは学生です」「今何時ですか」「毎朝7時に起きます」などはいわゆる「で

すます」体であり、これも相手を意識した上で丁寧に行った、待遇表現であるといえる。その後で学習する「学生だ」「7時に起きる」などは「普通体」とも言われるが、この「普通体」と先の「ですます」を含む「丁寧体」との使い分けはそれだけでも重要な待遇表現の学習である。日本語の場合、相手によって言い方を分けることは初級の最初の段階から学習することになっているわけである。どの言語においても丁寧な言い方とそうでない言い方の区別はあるわけであるが、日本語の場合は、何を言う場合でも必ずその区別をしなければならない。これはある意味では日本語の一つの特色であるとも言える。

初級の場合、通常は「文型積み上げ」とも呼ばれる、いろいろな文型を一つ一つ学習していく方法が取られるが、それとは別に、会話などでよく使われる表現を取り出して学習することも多い。特に日本国内で教育する場合、学習者は日本語を使う必要もあり、また、その要求も強く、実際によく使われる表現を練習させることも多い。「会話」としてそのような表現を扱っている初級教科書も多い。その「会話」練習においては、「会話」を暗記させ、演じさせるといった方法を取ることもある。

待遇表現教育を考える場合、中・上級で相手に応じた言い方としてそれだけを取り出して教育することをイメージし、初級では難しいと考える向きが多い。しかし、口頭表現すべてが待遇表現であると考えた場合、初級から、最初の段階から待遇表現の意識を持たせ、学習させることが重要であると考ええる。初級の最終段階になって「日本語には敬語がある」として「おっしゃる」「申す」などの敬語を扱うと、「敬語を使うことは封建的である」などと考えて反発する学習者も多い。初級の段階で、友達には「おはよう」、先生には「おはようございます」という使い分けがあることから、待遇表現を自然に学習させる方が効果的であると考ええる。この程度の使い分けはどの言語にもあるものである。

## 2.2 待遇表現教育の実際

待遇表現の教育でここで提案したいのは、「表現意図」別の練習である。今多く行われているのは、「～てもらえませんか」などを「依頼」の機能があるとして分類した「機能」別の練習である。<sup>5)</sup>しかし、既に存在するある表現を「機能」別に分類しても、実際の表現はいろいろな制約から、或いは効果を考えて、さまざまな表現で現れるものであり、十分に分類、理解することは難しい。表現を考える場合、「何を表現したいか」という表現する側の意識から理解し、分類することが必要である。この点からさまざまな表現の分析をこれまでに行ってきたが、<sup>6)</sup>教育の面においても、この点からの視点が必要である。「依頼」という「機能」を学習するのではなく、「依頼」という表現意図を持った時に、どのような表現をすればいいのか、という観点から表現練習を行うべきである。この場合、一文単位でなく、一連の表現の流れ、「文話」<sup>7)</sup>の単位で練習することが必要である。ある「会話」を丸暗記するのではなく、流れに沿って、一つ一つの表現をいくつかの中から選択し、相手の反応を見ながら表現するという練習をすべきである。この場合、言葉上の表現だけを練習するのではなく、自分の言いたいこと、自分のおかれた立場、相手との関係などを考慮することも重要である。一つの役に立つ表現を練習するだけでなく、自分と相手の立場、役割などを考えて、ある一連の表現の流れを選択し、そこでふさわしい表現を選択する、といった練習が必要である。これは初、中、上級いずれの段階でも可能であり、そのために学習者のレベルに応じ、教授者が適当なものを選択して教えることが必要となってくる。

## 2.3 教材例

ここでは初級段階での教材の例を示す。この教材は筆者がこれらのプログラムの学生のために開発したものの一部である。<sup>8)</sup>

## 8 さそい (誘い)

- |       |  |  |
|-------|--|--|
| 1     | しょくじに いきましょう<br>ごはん たべに いきましょう                                   | しょくじに いこう<br>ごはん たべに いこう<br>(めし くいに いこう) |
| 2     | かえりましょう<br>(そろそろ) いきましょう   | かえろう (よ)<br>いこう (よ)                      |
| 3     | ちょっと まってください<br>あとでいきます<br>いま、ちょっと<br>もうすこし してから (いきます)          | ちょっと まって<br>あとで (ね)                      |
| 4     | **にいくんですけど いっしょに いきませんか<br>うちに きませんか<br>いっしょに たべませんか             |  |
| 5     | うちで パーティー するんですけど きていただけませんか<br>のみかいを するんですけど (よかったら) きていただけませんか |  |
| かいわ 1 | 2  |  |
| J     | こんどのにちようびひまですか。  | A 12じですね。                                |
| C     | なんですか。   | しょくじにいきましょう。                             |
| J     | みんなでかまくらにいくんですけど<br>いっしょにいきませんか。                                 | J えーと。<br>あとでいきます。                       |
| C     | ああ、いいですね。  | A そうですか。                                 |
| J     | じゃあ、9じにひらつかえきで。  | じゃあ、またあとで。                               |

この教材は日本語初級段階の、日本に来て日が浅い、ホームステイをして大学の短期プログラムに参加している北米圏の学習者を想定して作成したものである。そのため、日本での生活、特にホームステイの場面や、大学でできた友人との場面で使うような表現を中心に作成した。初級の教科書に沿わないこのような教材を使う場合、学習者に十分な説明が必要である。この教材については、短い授業時間を有効に使うため、また、異なる母語の学生が

いる場合も考え、英語と中国語による解説を別途作成してある。授業に際してはその母語別の解説を学習者に渡し、授業の中では母語による解説は一切行っていない。

この教材を用いる場合、レベルの異なる学生に対してはそれぞれにふさわしい段階の表現を選択し、練習させている。学習の進んでいない学習者の場合は最低限の表現を練習させ、中級レベルの学生に対してはすべての表現、さらに多くの表現も練習させている。学習者に応じて扱う表現を変えられることが、異なるレベルの学生を同時に指導できる一つの理由である。最終的に「会話」を練習するわけであるが、もちろんこの会話を丸暗記させるのではない。流れの一つ一つについて表現を練習し、いくつかの表現を滑らかに言えるようになってから、いくつかの流れとして会話を練習させるわけである。この場合、日本人（日本語母語話者）を相手に会話することを想定しているため、相手の日本人の反応は自然なものでなければならない。相手の日本人の反応をどう理解するかも同時に教えるわけである。例えば、道などを聞いた場合に「ちょっと……」という反応があれば、それは「わからない」ということを示している、といったようなことである。

そのため、この練習においては、練習相手として日本語母語話者が加わると効果が大きい。日本人のパートを少しずつ変化させながら、何回も練習できる。練習相手の日本人が複数いれば、練習回数も必然的に多くなるわけである。相手により微妙に反応が異なるため、決まったいくつかの表現を暗記するだけでは十分ではなく、流れに沿った文話としての練習ができるわけである。また、1人を友人、1人を先生、などとしておけば、相手による使い分けの練習も自然な形で行いやすい。学習者にとっても日本人を相手に練習が自然に行えたという意識があれば、実際の生活の中でも使ってみようという気になりやすい。学習者にとって、目標言語でその母語話者と自然に会話ができたということは大きな喜びであり、達成感も大きいものである。



### 3 日本人合同クラスの意義

日本語母語話者である日本人学生にとって日本語初級の授業に参加することの意義は大きく、かつ、多岐にわたっている。まず、日本語自体に対する意識に変化がある。普段、母語として何の反省も意識もなく使っている言語が難しい、複雑なものであり、普段は気にしていないような問題点がたくさんあることに気づく。そこから日本語自体に対する関心が出てくる。さらにその言語を外国語として習得しようとする人々がいることを知り、自分の母語に対する感情が変化する。日本語を外国語として学習するということはどういうことであるかということ、つまり、自分では簡単だと思っていることを身につけるのがどんなに難しいことかを実感する。外国語学習一般の難しさや意義にも気づかされ、自分自身の外国語学習への反省にもなる。また、外国人と交流するためには英語など外国語学習が必要だという思い込みが一般にあるが、日本語を学習している外国人に対しては、日本語で交流することが必要であることにも気づかされ、自分の母語で外国人と交流する楽しさ、感激を味わう。日本語で話すことが学習者の益になるという視点を持つようになる。これは、ある意味では相手の立場に立って考えるという訓練にもなる。また、そのためには、普段話しているような話し方ではなく、初級の学習者に分かりやすい言葉で話さなければならない。どのように話せばわかりやすいかということであるが、これは外国語初心者に対する言葉ということであるが、それがどういうものであるかを知らなければならない。また、日本語学習者は日本語について、日本について一般的に関心があるので、いろいろ質問してくるが、それにうまく答えられないことが多く、そこから学ぶ。外国人との交流はまず自分自身、日本語、日本について知ることから始まるということなどである。その他に、実際に授業に参加することによって、日本語初級授業の実際を垣間見

ることができ、日本語教育についてのイメージを具体的なものにすることができる。

日本語超上級者である学部留学生も受講しているが、彼らにとっても、かつて自分の受けた初級授業を今の段階になってまた経験することは意義がある。今となっては不確かとなっている初級文法項目の復習にもなるし、初級者の間違いや戸惑いもかつての自分を思い出すようで、新鮮なようである。留学生は日本語教育に現在携わっている者もいるし、将来携わる可能性もあるため、その観点からもこの授業に参加することに意義を見出している。留学生の場合、自然な日本語の対応という点においては不十分な点もあるが、授業の中で学習者に適切なアドバイスができるなどの利点もあり、日本語母語話者とは違った意味の効果が得られる。

受講学生の反応や感想をまとめると以上のようになるが、この参加型の授業をするためにはかなりの準備と指導が必要である。知識、準備なしに行うと、初級授業が成り立たなくなったり、日本人を練習相手にすることについての効果が十分でなくなってしまうりする。ある程度の予備知識を身につけた上、授業、練習の意義を理解させ、一種の訓練を行っておかなければ、上述したような効果も期待できない。準備なしに行うと、「してもいいですか」に対して、「いいえ、いけません」のような、日常生活では実際に見られないような不自然な対応をしてしまったり、不必要な言動が学習者の混乱を招いたりしてしまうことになる。また、初級の学習項目に暗いため、学習者にわかる適切な日本語を使うことができない。初級学習の難しさがわからず、ある意味では形式ばっているといえる「はい、行きます」のような表現を教え、自分たちが普段使っている「うん、行く」といったような表現を教えないことに対して批判的になったりする。実際は「行く」のような表現は「行きます」より難しく、順序として「行きます」を定着させてから「行く」を導入しているのである。また、学習者の状況を考えると、誰に対しても失礼にならない「行きます」の形だけでも習得させる方が労力が少ないといえる。こ



のような事情を理解させておかないと、十分な効果が得られないということになる。

このために、基礎的な「日本語学」「日本語教授法」の知識を身につけさせるための授業を設置した。「日本語教授法」受講以前の前の学期に「日本語学」（1年後期，半期2単位）を設置している。また、「日本語教授法」（2年前期，半期2単位）受講中も初級授業に参加する授業と、日本人学生のための授業を交互に行い、指導を行った。「日本語学」では言わば「日本語学概論」を行っているわけであるが、半期では音声・音韻，表記，語彙，文法などの項目においても「日本語学概論」で期待される内容を十分カバーすることができない。体系的に「日本語学概論」を扱うことができないので、トピック的に各項目から選んで講義を行っている。特に文法項目では、「てフォーム<sup>9)</sup>の作り方」，「は」と「が」の違い，「いる」と「ある」，「あけてある」と「あいている」（自動詞と他動詞），「ている」の用法，「た」の用法など，初級文法項目に直接結びつくものを中心に，グループ討論などの方法で学生に考えさせる形で授業を行った。「日本語教授法」においては，基礎的な日本語教育に関する知識，方法などについて講義を行うほか，初級日本語教科書を全員に1冊ずつ持たせ，各自その中の1課を選び，その文法項目，授業内容を分析させ，発表させた。さらに，初級授業に参加した際は，その内容についてレポートを課した。参加に際しては授業後に各自の不適切な振る舞いなどについて注意を行った。

そこで初めて，日本人学生は初級授業において，不用意な発言や行動がいかに授業の妨害となり，理解を妨げるか，また，初級向けにコントロールされた話し方の難しさと重要性，コントロールされた上での自然な会話の持つ意味などについて学んだのである。日本語教育がいかに難しいかも身をもって知ったようである。

#### 4 日本人参加型授業の問題点

日本人参加型の授業は以上に述べたように特に日本人学生にとって意義の大きいものであり、初級受講学生にとっても、通常の授業とは異なり、同年代の日本人と直接にふれあうことのできる楽しい授業であり、実践に結びつく授業でもあるが、教育上、運営上からはいくつかの問題がある。まず運営上からは、このような授業を行い得る初級の授業が必要であり、日本人に参加させるための授業を別に設定しなければならない。また、人数の問題もあり、日本人学生と初級受講学生の数が適当なバランスを持っていなければならない。この授業を行った初年度、当初日本人学生50人以上が聴講を希望したため、かなりの制限を加えたが、それでも30人以下にはならず、授業が非常に行いにくかった。日本人学生の参加を完全なボランティアにすると、出欠が一定しないなどの問題がある。教室の大きさや机の配置なども制限があり、学生が自由に動ける形であるとは限らない。また、初級授業は50分1コマで行っているため、通常の学部の授業と時間が合わず、その点でも問題があった。

教育上では、何とんでも二つの全く異なった種類の授業を同時に行っているという困難さがあげられる。初級授業では学生にそれぞれの表現を身につけさせ、スムーズな会話が行われるよう指導しなければならない。日本人学生に対する授業としては、ただ授業を見学するだけではなく、単位を与える授業として、日本語教育についての知識等を身につけさせなければならない。さらに、日本語母語話者の練習相手として、初級の授業の邪魔にならないよう、余計なことをしないで、適切な練習ができるよう指導しなければならない。時間が十分でないため、レポートによる指導や発表の準備など、かなり時間外の指導も必要になってくる。両方の学生に気を配らなければならないため、かなり精神的にも疲れる授業となる。これらの困難を乗り越え、

少しでも効果が上がるよう毎年工夫した結果が現在の形である。

## 5 お わ り に

以上のように、効果も意義も大きいですが、それに伴う問題点もそれ以上に大きい日本人参加型授業である。今後も機会があれば、問題点を解決しつつ、更なる試みを行っていきたいと思っている。

---

### 注

- 1) 相手や場などに配慮した表現を「待遇表現」と言う。その中のプラス方向に対応する語彙である「敬語」だけでなく、ニュートラルなもの、マイナス方向のものも含め、表現全体としてとらえた述語である。
- 2) 蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1996）「待遇表現教育の指導」『日本語学』7月臨時増刊号など。
- 3) 以下に年度ごとの概要をあげる。

平成7年度 学 習 者：カンザス大学学生〔中・上級クラス（日本語学習1年以上）10人程度〕

日本人学生：ボランティア（募集）

授 業 形 態：日本人学生を練習相手に 全8コマ

平成8年度①学 習 者：ビクトリア大学学生2名〔中級（日本語学習歴1年）〕

日本人学生：「日本文化論」受講者 約30名 前期全12コマ程度

授 業 形 態：ビクトリア大学学生に対する初級授業を日本人学生の前で行う。日本人学生の中から毎週3，4名が練習相手として授業に参加。

②学 習 者：カンザス大学学生〔中級・上級（日本語学習歴1年以上）10名程度〕

授 業 形 態：上記授業に6月中4コマのみ参加。この場合、「日

本文化論」受講日本人学生は全員練習相手として参加。

平成9年度①学 習 者：ビクトリア大学学生4人〔中級（日本語学習歴1年2名），上級（日本語学習歴3年以上2名）〕，復旦大学大学院生1名〔中級（日本語学習歴1年程度）〕，計5名

日本人学生：ボランティア4名（「日本文化論」受講者の中から）

授 業 形 態：日本人学生をほぼ1対1で練習相手として。全11コマ

②学 習 者：カンザス大学学生10名〔中級・上級（日本語学習歴1年以上）〕

日本人学生：「日本文化論」「日本語教授法」受講者約25名

授 業 形 態：日本人2に対し学習者1の割合で練習相手として全4コマ

平成10年度①学 習 者：ビクトリア大学学生2名〔初級（日本語学習歴なし1名），中級（日本語学習歴3年1名），復旦大学大学院生1名〔中級（日本語学習歴1年）〕〕，計3名

日本人学生：「日本文化論」「日本語教授法」受講者12名

授 業 形 態：日本人学生を2グループに分け，1時間ごとに練習相手を交代

※この場合の「日本語学習歴」は大学における外国語学習でのもの。1年の学習時間はほぼ100時間程度と考えられる。クラス分けは，ほぼ，学習歴なしを「初級」，日本語学習歴1年から2年を「中級」，日本語学習歴3年以上を「上級」としている。この場合の「初，中，上級」は一般の日本語教育のレベル分けのものとは異なる。

4) 日本語教育において初級，中級，上級の大体の目安は以下のようになっている。

日本語能力検定試験では次のように規定している。

1 級 高度の文法・漢字（2000字程度）・語彙（10000語程度）を習得し，社会生活をする上で必要であるとともに大学における学習・研究の

基礎としても役立つような、総合的な日本語能力。(日本語を900時間程度学習したレベル)

- 2 級 やや高度の文法・漢字(1000字程度)・語彙(6000語程度)を習得し、一般的な事柄について会話ができ、読み書きできる能力。(日本語を600時間程度学習し、中級日本語コースを終了したレベル)
- 3 級 基本的な文法・漢字(300字程度)・語彙(1500語程度)を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力。(日本語を300時間程度学習し、初級日本語コースを終了したレベル)
- 4 級 初歩的な文法・漢字(100字程度)・語彙(800語程度)を習得し、簡単な会話ができ、平易な文、または短い文章が読み書きできる能力。(日本語を150時間程度学習し、初級日本語コース前半を終了したレベル)

一般的には、初級終了で3級、中級終了で2級、それ以上が上級とされる。1級合格者以上は超上級と言える。学部留学生はほぼこの超上級レベルである。

また、ここでのクラス分けのレベルは上のレベルで言うと、すべて初級に含まれる程度であるが、カンザスの日本語研修グループを三つに分けた場合のクラス分けの名称として初・中・上級の名称を用いたということである。一般的な日本語教育上のレベルとは異なる。以下、レベル分けはこの基準で行っている。

- 5) 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』などいくつかの教材がある。
- 6) 坂本恵(1997)『「提供」表現をめぐって』(『国際経営論集』第13号)など。  
なお、筆者の敬語、待遇表現全体についての考えは蒲谷・川口・坂本(1998)『敬語表現』(大修館書店)参照。
- 7) 「文語」とは文章・談話を総称したもの。
- 8) この教材は以下のような構成になっている。
  - 1 あいさつ 自己紹介
  - 2 買い物 郵便局で
  - 3 許可を得る ホームステイで
  - 4 依頼 友人に頼む

- 5 質問1 バスに乗る
  - 6 質問2 友人に聞く
  - 7 電話 電話を取り次いでもらう
  - 8 誘い 友人を誘う
  - 9 申し出 ホームステイで
  - 10 別れの挨拶
  - 11 説明する スピーチ
- 9) 「行って」「書いて」「見て」などの第2連用形とも言えるものを，日本語教育では「てフォーム」と言い習わしている。